

Eureka VII

六年制通信 No.20 令和2年10月16日(金)号

MUST から WILL へ

テストが終わりました。皆さん、満足のいく結果だったでしょうか。定期テストなんて今は嫌でしょうが、大人になれば定期的に「答えのある試験」を受けていたころが懐かしく思い出されることでしょう。答えが用意されているということは100点が取れるということですが(0点も取れますけど)、そしてそれで一喜一憂するのでしょうか、社会に出て直面するのは答えのない問題ばかり。何が0点で何が100点かはつきりしないことも多い。しかも問題は突然やってくる。君たちもやがてそういう場面に遭遇することでしょう。ですから今が一番楽しいのかもしれないよ。それに、定期テストとはいえ、君たちの努力の評価という一面は確かにあるのですからね。ちゃんと準備をして臨まなくてははいけません。次は期末試験ですが、すでに準備が始まったと思ってちょうどいい。何も特別なことは必要ないのです。毎日の予習復習で試験準備の大半は終わり、そう思って頑張ってください。

とはいうものの、試験が終わったばかりで次の試験の準備にかかれと言われても、どうしてもやる気が出ないと感じるかもしれません。わかる気もします。私にも経験がありますから。試験に限らず、何をするにも「やる気が出ない」ときはあります。私も若い時に「やる気さえ出れば…」と何度思ったことでしょう。しかし、やる気が出ないからできないと思っている人は大きな誤解をしていると私は思います。それは順番を誤解しているのです。「やる気」と「やる」の順番が違うのですよ。「やる気」が先にあるのではないのです。「やる気」→「やる」ではなく、「やる」→「やる気」が正しいのです。以前、行為か心かという話をしました。花見で面白半分に喧嘩のまねごとをしているうちに本当の喧嘩に発展するという、あれですね。行為が心を支配することがよくあるのです。ですから、やる気を出す最も効果的な方法はやり始めることなのです。気の進まない時でも、やっているうちにやる気が出てきます。これはヒルティの「まず始めよ」と同じことですね。

もう一つ、やる気を削ぐ、あるいは持続させないような考え方をしている人が多いのではないかと思います。それは「～しなくちゃ」という考えです。あれをしなくちゃ、これもしなくちゃ、と頭の中でMUSTを繰り返してしまう人が多いですね。しかしその考えは、今から自分がしようとしていることが強制されている、つまりやらされている感覚をもたらします。知らず知らずにね。強制とは、その裏側に「自分は本当はしたくない」というのが隠されていますから、やる気が出てくるはずがないのです。この考え方を「～しよう」つまりWILLに転換することが大切です。

MUST から始めたことを途中でやめると「挫折」が残ります。WILL から始めたことが途中で終わっても「続き」があります。これは大きな違いです。未完で終わったことほど印象に残る、これをツァイガルニク効果というのですが、ドラマの続きが気になって仕方ない、という現象もそうですね。一話完結のストーリーより頭に残ると言われています。WILL から始めた勉強ならツァイガルニク効果が期待できますからドラマの「…つづく」のように、将来の完結に向けて前向きに取り組めます。ですから君たちは、MUST から勉強を始めてはいけません。というっかり「～しなくちゃ」思ってしまったら、声に出して言い直さない。「～しよう」と。

私は三重中高の6年間で、いつも言うように、君たちが辛抱強く学ぶ意欲を身につけてほしいと強く願っていますが、さらに MUST から WILL へ考え方を転換する習慣がついたら、もう言うことないですね。二つとも教育の本質だと思うから。

テスト勉強の話に戻ると、定期テストの準備にばかり時間をかけるのはもったいないと思っています。学校の勉強とは別に君たちが詩を暗唱したり、あるいは書いたり、科学の本を読んだり、星を観測していたりしてほしいというのが私の本音です。誰に知られなくてもいいから、自分だけの知的空間と時間を持ってほしいと心から願います。答えもなく試験もない、純粋に楽しいから勉強する分野を君たちには持っていてほしいと思います。

今週のおすすめ

- ・ 夏目漱石 『三四郎』 (岩波文庫)

内容は恋愛(失恋)小説ですね。古き良き時代の。今の私には話の筋に魅かれるものはありません。ただ、この小説には漱石の教養の高さを示す有名なフレーズがあるので、それを紹介しましょう。広田先生から Pity's akin to love. という有名な句があることを示され、それを三四郎と与次郎が訳すシーンです。与次郎が「可哀想だた惚れたって事よ(可哀想だと思うということは惚れたという事よ)」でどうだと。そこに三四郎が思いを寄せる美禰子加わる。

この Pity is akin to love. は私の使っている英和辞書には(ことわざ)として載っています。だから有名な句だと私も思って、授業でも取り上げたことがあります。しかし驚いたことに、この表現は『オックスフォードことわざ辞典』に入っていない。世界最高の OED (オックスフォード英語辞典) にもない。アメリカの『ランダムハウス英語辞典』にもない。ところが日本で発行された辞書には入っている。漱石の影響としか思えないのです。この句はトマス・サザーンの劇(1696年)から拾われたのですが、この人は日本で最も詳しい英文学史の本『イギリス文学史』にも出てこないほど無名な作家です。漱石はこんな本まで読んでいたのかと、日本の英文学者たちを脱帽させた一節として有名になったわけ。あまり知られていないかもしれませんが、漱石は当時の日本で一番と言っているほどに英語のできた人です。辞書の編纂者たちは『三四郎』を読んだ日本の若者が辞書を引くだろうと考えたのでしょう。日本の辞書には漱石のオマージュが、まだ他にもあるかもしれませんね。

BGM は 柴田 淳 の 片想いでした…。